



東北 復興日記

まだまだ



柳生農園経営

福島裕さん

▶▶ 229

たのは、環境はかけがえのないもの、幸せな暮らしには安心できる環境が一番大切であるということでした。それで環境を汚さない農業へ切り替えました。次世代へ安全な環境を残すことが、残りの人生の目標です。

風評被害に苦しむ福島の農業を、塩害に強く、放射能吸収率も極めて低い綿の栽培で再生させる「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」が二〇一二年に始まり、わたしは一四年から参加しました。

以来、二千人を超える大学生や企業人が私の菜園を訪れました。

福島県いわき市四倉町上柳生で、妻、義母と三人で暮らしています。八年前に六十歳で会社を定年退職し、農業を始めました。現在は一・五畝の農地で綿、野菜、果樹を栽培しています。

東日本大震災が起きたのは、農業を始めて二年目。沿岸から八キロ離れた中山間地域なので津波被害はなかったものの、原発事故の放

環境汚さない農業を

射能汚染の影響が深刻でした。農家は見えない放射能による生活と健康への不安におびえました。情報の混乱も続く中で離農が加速し、休耕地が増えました。

もともと農地が荒れることに心を痛めていた私は、行政指導に従い放射能検査を受けながら農業を再開しました。その過程で気づい

オーガニックコットンや野菜の栽培に共に汗を流し、交流しています。地域とのつながりも増え、地域の幼稚園児や小学生が農業体験とオーガニックの学習にやってきました。

市内外から来る人たちが昨年、「畑の会」をつくりました。メンバーは野良仕事や自然との触れ合いを楽しんだり、農薬や化学肥料を使わない有機栽培を実習したりしています。都市と農村の交流を通して、支え合う生き方を実践する場にもなっています。菜園を訪れる人々に、健康な農地で作る安全な作物のこと、有機栽培ときれいな環境の大切さをお伝えしています。



農業体験に来た小学生たち

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。